

医学類での聴覚障害学生への支援について

菅江 則子

筑波大学医学系技術室 (PCME 室)

〒305-8575 茨城県つくば市天王台 1-1-1

概要

平成 16 年度に入学した聴覚に障害を持つ学生に対し、授業、実習、共用試験 OSCE、臨床実習にパソコンノートテイク、手話通訳支援を行った。また医学類長、学年総コーディネーター、担任、手話通訳支援団体、医学教務、PCME を構成員にした聴覚障害支援検討委員会を立ち上げ、医学教育を保障するため今後もどのような支援が必要か模索中である。

キーワード：手話通訳、手話通訳支援担当者、臨床実習診療グループ

1. はじめに

筑波大学医学群では、平成 16 年度より (図 1 参照) 「新・筑波方式」と呼ばれる医学教育カリキュラムを導入した。

- ①知識伝達型講義の大幅削減と問題基盤型テュートリアル（小グループ討論）の全面的導入
- ②クリニカル・クラークシップ (本格的な参加型臨床実習)
- ③信頼される医療人として必要な知識・技能・態度を 1 年次から 5 年次まで継続して学習する医療概論

2. 聴覚障害学生に対する教育を保障するために行った支援

1 年次、2 年次、3 年次：講義形式の授業では、パソコンノートテイクによる支援を行なった。テュートリアル (小グループ討論) では、同グループの学生にメモをとってもらったり、テューターには、なるべく障害学生のほうに顔をむけ、ゆっくり発音してくれるよう理解を求めた。

学生ボランティアによる手話通訳支援とテュートリアルで用いるシナリオの医学用語の抜出など。

基礎医学実習では、注意事項を明記したものを通常通り各部所に掲示した。

4 年次：臨床実習に出る前の、診察法演習、Pre-C.C. 共用試験 (CBT、OSCE) をどのように行っていくからよいか、障害学生の受け入れ経験のある他大学からの情報を得るため、教職員対象の FD を実施した。このことにより、医学類長、学年総コーディネーター、担任、手話通訳支援団体、教務、PCME を構成員とした聴覚障害支援検討委員会を立ち上げた。

身体診察の実習、共用試験 OSCE (実技試験) では、手話通訳支援を実施した。

臨床実習 (クリニカル・クラークシップ)：臨床実習は、筑波大学附属病院、または、地域の病院、診療所で行われるため病院長からの患者への協力と周知、看護師、ならびに病院スタッフへの協力の依頼を行った。また、手話通訳支援の方法、時間、手話通訳支援担当者、診療グループとの調整などを行った。

2.1 障害学生の受け入れ経験のある他大学からの情報収集

すでに聴覚障害のある学生を受け入れ、6 年生まで進んでいる帝京大学から講師を招き、どのように支援をおこなったかを学ぶための講演会を開催した。教職員、附属病院のスタッフ、レジデントなど、臨床実習に協力いただく方々を対象とした。

共用試験 OSCE (臨床技能と態度を評価) では、医療系大学間共用試験機構 (以下機構と記す) と綿密に連絡を取り合い、試験内容に沿った支援を行った事、臨床実習にはすべて手話通訳支援を実施したことなど、情報をいただいた。しかし、手話通訳支援には費用と、人材の確保が必要不可欠であることがわかった。

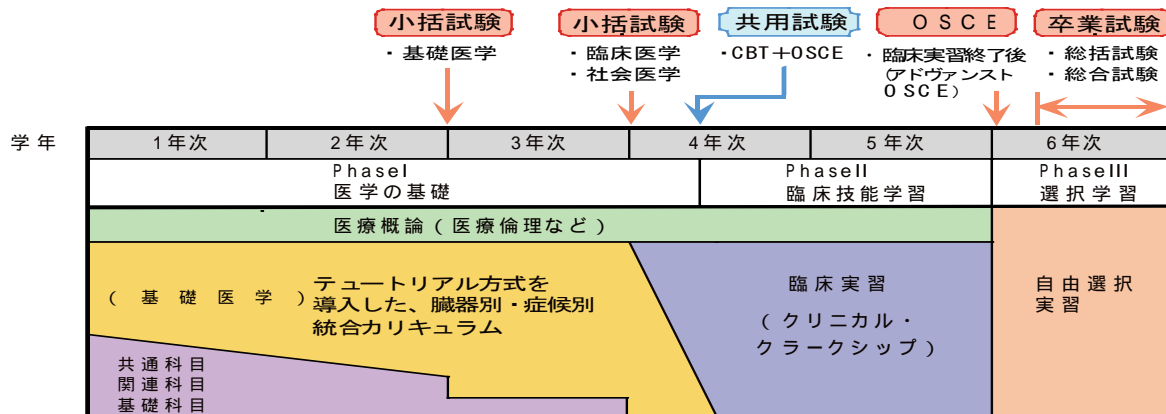


図 1. カリキュラム概略

2.2 共用試験 OSCE (臨床技能と態度を評価) への支援

4年次では、臨床実習(クリニカル・クラークシップ C.C.と表記する)に備え、準備教育として身体診察法の演習、チーム医療を学ぶ Pre-C.C.など実習を中心としたカリキュラムが組まれている。

3年次までの実習にはなかった本格的臨床に近い実習が実施されることから、同じ実習グループ、担当教員に承諾を得て手話通訳支援を開始した。

この時点では、学生ボランティアと手話通訳支援団体の協力を得た。実習担当医師には好評で本人も実習内容がよく理解でき、共用試験 OSCE (以後 OSCE と表記する) に向け準備を始めた。この試験は、機構から指定された課題を実施しなければならず、C.C.に進むにはこの試験に合格しなければならない。

問題は、循環・呼吸系の胸部診察の項目で、聴診を伴う課題が設定されたり、医療面接では、患者役の模擬患者から初診時の問診対応を行わなければならない。今回の試験では、機構との合意の下、医療面接と神経診察の項目でのみ手話通訳を導入した。

2.3 4年次、5年次の C.C. (クリニカル・クラークシップ)

OSCE を、多くの方々の支援と本人の頑張りで合格し C.C.に進むことになった。

筑波大学附属病院の実習に出るにあたり、病院長から患者に対して聴覚障害を持つ学生が実習生として参加することへのお知らせとお願いの文書が院内に掲示され、スタッフも含め周知いただくようご配慮いただいた。忙しい病院業務のなか一人の学生だけに時間を割くことは、きわめて困難であり、カンファレンスなど大勢での勉強会では、情報を共有できず医学教育の保障が十分にされないことから、聴覚障害支援検討委員会を立ちあげ、予算、支援方法などを検討し手話通訳支援を1日3時間までを目安とし、特別予算をいただくことになった。

手話通訳支援は、茨城県水戸市にある「茨城県立聴覚障害者福祉センターやすらぎ」とつくば市の「筑波技術大学」の協力を得て、手話通訳者を派遣していただくことになった。

実習をする各診療グループには、事前に手話通訳支援を希望する実習スケジュール表を提出していた。

臨床実習では、予定していなかった事態がたびたび起こり、1日3時間までの支援時間もかなり変動があったが、「やすらぎ」の皆さんのご協力とご理解で何とか支援体制が整い始めた。手話通訳支援担当者からは毎日、日報(図2を参照)を記載してもらい、支援での問題点などを指摘してもらった。診療グループと看護師の方々にも学生の実習状況などを記載する回覧ノートを作成し改善できることは、すぐ実行できるよう検討委員会で検討を重ねた。

しかし、外見からは健常者とまったく変わらないため、後ろから声をかけられたときなど対応できず相手の方に不快感を持たれたり、危険なこともあり、「聴覚障害がある学生」であるということがすぐわかってもらえるように、PHS のストラップを手話通

訳者も同じ緑色とし、手話通訳者であることを名札に明記した。

また、診療グループ内での聴覚障害を持つ学生が実習に来ているとの情報を周知いただくため、各診療グループの実習初日には、毎回、手話通訳者と学生を朝のミーティングで紹介した。

会話手段は、どうしたらよいか、少しだけでも聞こえるのか全く聞こえないのかなど、質問がありそのつど説明した。

手話通訳者からは、カンファレンスなどで医学専門用語が多く飛び交い通訳しきれないとの問題がでた。

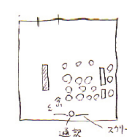
| 【活動の記録】 | | 通訳者名 |
|---------------|--|---|
| 活動日 | 2009年8月27日(木) | 担当時間 |
| 実習科 | 消化器内科 | 16:00 ~ 16:45 |
| 時間 | 内容(場内) | 医師-気づいた点など |
| 15:00 ~ 16:45 | 1F CT室 「4科合同カンファ」 いつも同様2つのスクリーンの間に座る スライド説明はスクリーンを見てもらいながら、手話も少し見せながら 映像に関しては映像、手話も同時に見せよう。 消化器内科の医師が内科の医師と通じたのでそれを待たせながらの進行となる。 レントゲンフィルムをスクリーンに写す機械が故障(壊れ?のため、 左側に移動して写)が医師、通訳も少し移動するが、Dr.が集まるためしゃがんで 通訳、幸川君には見えにくい位置となってしまふ。 聞き取りにくい事も多く聞こえる範囲での通訳となる。 | 消化器 胆石症、胃癌、大腸がんの事例、病歴1例と少く早く終了 |
| | |  |

図2. 手話日報

2.4 手話通訳の限界(専門用語など)をどうするか

医学専門用語が早口で、さらに略した英語で話されると通訳ができない。専門用語を勉強できないかとの要望があり、勉強会を持つことになった。主催は支援を受ける学生で、資料を準備し筑波技術大学の協力をいただき、手話通訳支援担当者が集まり「筑波大学医学生支援、通訳者研修会」が定期的に実施された。

「臨床実習での手話通訳に関するワークショップ」として報告書がまとめられた。

支援を受ける学生と支援者間でわかりやすい手話の形(図3参照)などを決め、すばやく理解できる伝達方法を共有した。この研修会は、両者に非常に良い効果が得られたようだ。

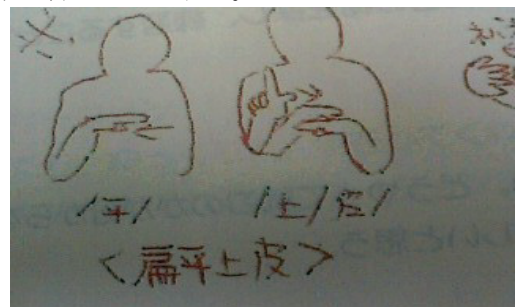


図3. 扁平上皮の手話



図 4. 1 年次、2 年次、3 年次のテュートリアルの様子

3. まとめと今後の支援をどうするか

実習は C.C.7 までである。実習すべてに手話通訳支援を実施するか検討委員会でかなり検討された。実際に医師になり就職したとき、いつも手話通訳をつけないと仕事ができないのではどうか。手話通訳無しでどこまでできるのか経験し自力でやってみるのは大学にいる今しかできないのではないかと。学生本人の意向も組み入れ、C.C.6 から手話通訳支援無しの実習がスタートした。今まで実習してみて通訳以外の支援はどうしてもらいたいのか、自分はどこまでやれるかなど、支援協力願いと文章化し、附属病院以外の病院担当者と事前に打ち合わせをし、手話通訳支援のない実習に挑んだ。かなりつらい試験だと思うが、現在進行中である。6 年次になると自由選択実習が始まる。

自分の将来を臨床医として進むのか、研究者として進むのか選択の時期が迫っている。今後、どのような支援が必要なのか課題は山積みである。

とにかく無事卒業し、医師国家試験に合格して欲しいと切に願っている。

Support for hearing impaired students in the School of Medicine

Noriko Sugae

Institute of Medical Science, Technical Service Office for Medical Sciences, University of Tsukuba,
1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki, 305-8575 Japan

A notebook PC and sign language interpretation were provided to students with a hearing impairment who were admitted to the School of Medicine in 2004 for use in classes, practica, standard OSCEs, and clinical practice. In addition, an exploratory committee on support for the hearing impaired was formed; its members include the Dean of the School of Medicine, overall academic coordinator, head instructors, sign language support groups, and personnel from the School of Medicine's Academic Affairs and the Office for PCME. The exploratory committee is exploring the types of future support needed to provide medical education.

Keywords: sign language interpretation; supervisor of sign language support; clinical practice and care groups